

イギリスぶらり旅

佐藤 幸子

1

昨秋ある大学の先生が「去年イギリスに留学してからイギリス病になって」と言われるので、「まあ、そうですか、私はニュージーランド病ですが」という会話をしたことがある。そうかしら、私はイギリスには数回行っているけれど、それほど良い印象は持たなかったけれど……と私は胸の中でつぶやいた。でもリヴァプールなど行ってみたいと思う都市はまだいくつかあった。そしてロンドン大学に研修に行った友人に招かれて、昨夏、久しぶりにイギリスを訪れることにした。なんの準備もしないまま飛び出してきたが、偶然空港で入手した『地球の歩き方』を飛行機の中で読みまくったおかげで、多くのことを知ることが出来た。

それにしても綱渡りのような日々だった。7月31日小樽ヒルトンでのニュージーランド大使がご出席して下さった小樽ニュージーランド協会のパーティーを終えて、札幌発23時の汽車に乗り、午前2時40分士別到着、親戚の引越しのお手伝いを3日間、8月4日に士別から函館に行き夕方到着、アフリカ音楽祭を聞き、夜中の1時44分に函館を出発、朝7時半小樽到着、一眠りしようと思ったら電話でそれどころでない。まもなく天狗山でのユネスコのサマーキャンプのため最上線のバスにのる。小、中学生と小樽短大で研修中の韓国中央大学の学生のお世話を終え、すぐイギリスに出発したのだった。

思いがけず今回のイギリス旅行はこれまでにない非常に良い印象を私に与えた。イギリスは景気が良く、活気に溢れて、従ってホテル代金もなかなかであった。でも人々の心は穏やかで、にこやかな笑顔にこちらまで幸せな気持ちになった。

8月8日朝5時55分に着いてパスポートのチェックをして荷物を取り、ナッスイング ツウデクレア のカウンターにはだれも人がいなく、スースーと出口に出てしまった。あっけないほど無防備な体制である。ホテルまでシャトルを使うと友人には言ったが、『地球の歩き方』を読んでいると、シャトルという言葉はまったく現れず、最新のエクスプレスがヒースローからなんと私の泊まるホテルのあるパデントン駅まで通っているとあった。15分間隔で15分で着いてしまう。最近出来たばかりの立派な電車で、ロンドンの地下鉄のようにガタンガタンと煩くなくきわめて滑らかに走る。ホームでなにげなく話しかけた知的で美しい女性はシンガポールからボーイフレンドを尋ねてロンドンに遊びにきたとのこと。弁護士だそうだが若いのにびっくりすると、いやもう33才だと言う。かって憧れた職業のせいか弁護士と聞くと急に親しみを覚えるのだ。私は12月にシンガポールで学会がありそのあとパースに行くというようなことを話していると、まもなくパデントンに着いてしまう。彼女と名刺を交換して別れる。パデントンの駅を出ると雨だった。大きなトランクをもってタクシーの乗り場に行くとすぐそこと言われる。まさにその通りなのだ。ハイヤーに乗る必要などないのだが、場所が良く分からない上に、雨と荷物だ。私のホテルのある通りをみつけたが、でもホテルは分からない。そこへ赤いバスが来たので、運転

手に聞いてみると、何番とやらのバスに乗れなどと言う、すぐそこだというのに。まったくいい加減である。この辺が日本の運転手と違うところだ。日本の場合はこれ程のトンチンカンはずがないだろう。そんなのを相手にしてられないし、丁度タクシーが止まっていたので（感じの良い初老の人だった）、近くて悪いけれど場所が分からないのと言うと快く乗せてくれた。なんだからぐるぐる回って、近いようで結構あった。これなら重い荷物を引っ張って雨のなかホテルを探すのはかなり難しいことだ。

ホテルについてほっと一息ついて、お茶を沸かして一眠りしようと思った時、リンと電話のベルが鳴る。もう友人が来たのだ。紺の着物に着替えてロビーに出ていくと、な、なんと彼は誰か分からないほど髭むじゃらで、見るなり私は吹き出してしまった。最近カンタベリー大聖堂の大主教になった Rowan Williams 氏が髭を生やしているので、彼を尊敬する友人も髭を伸ばしたとのこと。私はあっけにとられて、ハーマンの美学とはこのようなものなのか、髭の嫌いな私にはさっぱりわけが分からない。

この日私は彼の案内で、一日ロンドンを歩き回る。ロンドンでは一日一枚の切符で何度も地下鉄とバスに乗ることができる（デッケンズハウス——C. Dickens (1812~1870) はここで Pickwick Papers, Oliver Twist, Nicholas Nickleby などを書いた——、かねて行きたいと思っていたマダムタッソー人形館、正面玄関部分がすっかり新しく豪華になった大英博物館——ただし期待の日本館はクローズしててがっかり、小樽博物館の館長によれば、予算が充分でないので新しいロビーを結婚式などに貸し出すとのこと——）、トワイニング紅茶の本店ではあまりにもお安いのでびっくり、お土産用の紅茶をどっさり買い込む。奥行きはあるが京都のように間口の狭いこの店から世界中に紅茶を送り出していると思うと感無量であった。夜には世界の有名人が行くという『スコッツ』というフランス料理店に行く（我々もかなりミーハーだ）。幸子先生という有名人が行くのだからと彼にからかわれる。行く前に彼が電話でドレスコードはあるのかと聞くと、それはないとのこと。世界中から旅行者が訪れるのだから、そんなことは言っていないのだろう。玄関を入ると巨大な花瓶に溢れんばかりの花が生けられ、高級フランス料理の店にしては高級感の中にもちょっとインフォーマルな雰囲気があった。料理の味は格別であった。帰りの地下鉄で隣に座った40代くらいの女性に駅を降りてからホテルまでの道は危険ではないだろうかと聞くと、彼女は私も同じ駅で降りるから送ってあげましょうと言ってくれる。夜道を歩きながらいろいろ話している内に、彼女の家には日本の学生がステイしているので、日本に帰ったら電話を下さいと言う。なるほど私を送ってくれると気軽に言ってくれたのにはそういう事情もあったのだと知る。彼女にとっては日本人は極めて身近かな存在だったのだ。地味な感じの、人柄の良さそうな女性であった。自分の時間がほしいのでパートタイムジョブをしているようだ。

次の日、彼に付き添ってもらいパディントン駅で切符などの手配をする。「たった2晩のホテルの予約だけでいらしたのですか？ 度胸がありますね」。あきれ顔の彼に「だって先生が2日位ホテルを予約して、後はこちらで細かいスケジュールをたてればとおっしゃったから」その通りにしたのに、今さらそれはないでしょう。ともかく、その時帰りの飛行機の時間を二人で見誤ってしまって、後で大いに困ることになる。ストラットフォード・アポン・エイボン、リバプール、エジンバラ、カンタベリー、フィッツブルと回ることにする。

ところで髭の Williams 氏が紆余曲折を経て昨年 11 月カンタベリー大主教に就任した背景には現代のイギリス社会の難しい問題が反映されているのである。彼は危機的状況にある英国教会を救うべく選考委員会によって選出されたが、その選考過程において彼の女性司祭やホモセクシュアルの司祭に関するリベラルな見解をめぐって、議論を呼んできた。しかし、信者数の急減、その結果閉鎖に追い込まれる教会の急増、高まる教会指導者層への批判に答えるべく、Williams 氏があえて指名されたのである。彼は商業主義が横行する現代社会におけるキリスト教の重要性を強調し、道徳の再生を自らの責務として、高い評価を受けたのである。またイラク攻撃への反対、デイズニーランドの子供への悪影響の恐れなど政治、社会問題にも積極的に発言する彼の行動力が歓迎され、今、イギリス社会では新しい指導者への期待が高まっているのだ。

2

お馴染みのストラットフォード・アポン・エイボンの町は 3 度目である。ここだけは例外的に駅の傍の立派なホテルに泊まることにする。なんとも可愛らしい町で遊ぶ所が沢山あり、数日滞在したいと思うほど魅力的な町だ。町をゆっくりゆっくり歩いていると、中年の優しい感じのご婦人がキモノ姿の私と一緒に写真を撮りたいとのこと。ご主人が我々二人の写真を撮ってくれる。ホテルで日本料理の店を紹介してもらい、夕食を食べにそのレストランに入った、が、それは中華料理の店であった（これ程日本人観光客の多いストラットフォードに日本レストランがないのだ）。竹など飾ってあって、私も日本料理店と思ってしまった。どうしようかと迷っている私に一人の日本女性が立ち上がって「宜しければどうぞ」。そばに西洋人の男性がいるので、おもわず「よろしいのでしょうか？」と聞くと、彼は少しも迷惑そうな様子も見せずになこやかに「シユア」と言ってくれた。それから食事が終わるまで話に花が咲いて、実に楽しい一夜であった。男性はオーストラリア人でペディントン駅で鉄道の仕事をしていて、女性は英語学校で勉強していたが、彼女の努力が実を結んでロンドン近郊のイギリスの会社にやっと就職することが出来たとのこと。2 人の馴れ初めの話が実に面白かった。2 人とも一度も行ったことのないパブに友人にしゃにむに引っ張られていやいや行って、そこで出会ったのだ。ほんのわずかの時間しか同席しなかったのに、男女の中というのはまことに不思議なものだ。見るからに真面目そうな、感じの良いカップルであった。

夜はシェクスピア劇場で“Pericles”を見る。舞台構成上実に様々な工夫を凝らしていた。その帰りふと寄ったパブでジャズの生演奏を聞く。演奏している人達はすべて初老の紳士で、曲はほとんど古いジャズであった。そのパブはゾクゾクするような素敵な間取りで、お部屋は古風で魅力的な雰囲気だった。どの部屋も窓やドアが開いていて、どこかで繋がっている。人々はそれぞれおもしろおもしろに好きな場所に座って、お酒を飲んでいる。窓枠に腰を掛けて、ビール片手に友人と談笑している人もいる。2、30 人のお客が聞いているメインのお部屋の後ろからそっと入っていくと、そこに高校生らしい女の子がいた。ちょっとすれた感じで、あまり性格の良くなさそうな少女であった。東京から一人でこの英語学校に英語を勉強にきているとのこと。イギリスでホームステイをして英語学校に通っている若者が沢山いるのは誰でも知っていることだが、シェクスピアのストラットフォードでまでそんなことが行われていることは考えてもいなかった。シェクスピアだけの観光地だと思っていた。私はストラットフォードに対してはシェクスピアの故郷というどころなくロマンティックな気分があるのだが、現実はいかにないのだ。

3

リバプールの駅に降りるとすぐ目の前に観光案内所があって、ホテルを紹介して貰う。観光バスも土産物もすべてビートルズ、ビートルズである。まさにビートルズでもっている町だ。観光バスに乗ってビートルズゆかりの場所を回る。ホテルのすぐ側の小さなバーをのぞいてみると、優しいママさんが歓迎してくれる。2人の初老の男性が座っていた奥の広い部屋の壁一面に過去の有名なスター達の写真が張ってあるので、ここを訪れた人達かと聞くと、いやそうではない、ただのデコレーションとのこと。ママは町の地図やイベントのガイドなどあれやこれや様々のパンフレットを次々と出してきて、精一杯サービスに勤めてくれる。その善意に溢れた暖かさは、沢山の人々に親切にいただいた今回の旅行中で最も心をうたれたことだ。もう一度きつとここへ来るぞと思わずにはいられなかった。夜ふたたびそのパブに行きたかったが、ここでとうとう連日の疲れがどっと出てしまい、ついにホテルで早めに沈没してしまった。私としたことが不名誉なことであった。

4

リバプールから車でエジンバラに行く。エジンバラは2度目なので、気が楽である。目下サマーフェスティバルの最中で、町中観光客でかなり混雑していた。ストラットフォードでやっとB&Bを紹介してもらおうが、町の中心から少し離れていたが、バス1本で町に行くことが出来便利な所だった。観光バスに乗って一回りした。エジンバラ城で有名な「タテュー(軍楽隊のショー)」があるので、あちこち当たってやっとそのオフィスを捜し当てたが、キップはすべて売り切れであった。前回ビデオを買ったが、まことに面白いものであった。同じような楽隊の演奏でありながら、見ても見ても飽きないのだ。楽隊が演奏しながら、たちまちの内に様々な隊形に整列する。実に見事なものである。エジンバラ城は前回見ているので諦めて、かつて訪れた日本レストランに行くことにする。

西洋の建物をサラリーマンであったご主人が見事に高級日本レストランに変身させていた。旅行者としてこの町に来てすっかりここが気に入ってしまい、素人のご夫婦がお店をはじめてしまったのだ(ただ最近建物が古くなって修復にお金がかかり、続けることに疑問もあるらしい)。奥さんは元短大の被服の先生で、見たこともないようなそれは個性的な帯をしていたが、彼女が作ったとのことで納得した。前は疲れていて洋服であったが、着物のことで話に花が咲いた。このたびは張り切ってピンクの絹の着物を着た。彼女は私を覚えていてくれて、こんな綺麗な着物を着てご旅行ですかとびっくりされていた。立派な日本料理のコースであったが、もやしというありふれた材料なのにその茹で方、味の付け方が抜群で、つくづく料理は材料が高価であることと美味しいこととは直結しないと思った。日本人旅行者でもこんな良い店があることを知らない人が多い。「タテュー」は入口で1枚や2枚キャンセルがあるものだが、夜上演されるのでじんじんと冷え込んで、冬支度をしないと大変な目に遭うそうだ。びっしり人が座っているので出るに出不れず、むしろ切符が手に入らなくて運が良かったと言われた。

5

エジンバラの次はカンタベリーであった。カンタベリーの観光案内所で紹介してもらったホテル「フォルスタッフ」は名前だけでも私ははしびれてしまうのだが(シェクスピアの『ヘンリー4世』に出てくる飲んだくれの肥満の老騎士で、ハル王子にあらゆる悪さを教えたドン・キホーテ

と並ぶ世界最大の喜劇的人物の名前)、日本では見ることもない風情のあるホテルであった。シエクスピアの時代より古い歴史を持つホテルで、庭、レストラン、バーなどの様子にはまさに痺れてしまうほどのなんとも言い様のない味があった。

モームが卒業した「キングズ・スクール」が町の中心にあり訪ねたが、夏休みで中を見ることは出来なかった。綺麗な町であったので、ゆっくりと散歩して楽しいひとときを持つことが出来た。タイ料理のレストランで夕食を取ったが、外からは質素に見えたが中はかなり豪華なレストランで、食事も良いお味だった。仲の良さそうな40代らしい夫婦が経営していた。あまり素敵なお店だったので、彼等と一緒に写真を撮らせていただいた。

6

かつて研究した W. S. Maugham (1874~1965) が幼年時代を過ごした Kent 州の Whitstable (フィットステーブルと発音していたが現地に行くともまったく通じなく、s の音はぬかしてフィッターブルと発音されていてびっくりする、研究書にはウイットステーブルとある) はロンドンに近かった。ここは数年前にすでに訪れているので、気楽な気持ちで宿も決めないで行った。以前訪れた時は駅を降りて右に行くべきか左に行くべきか、まったくわけが分からず途方にくれた。丁度娘の出迎えを待っていた老夫婦と一緒に駅前の立て看板の地図を見てくれたりしたが、さっぱり分からなかったことを思い出した。一体どうなることかと暗澹とした気持ちであったが、結局、観光案内所に行くことを思いついて、とうとう初期の目的を達することが出来た。あの時、モームが毎夜訪れたというバーに行くと、マスターは親切に対応してくれた。ごく普通のパブであった。しかし、そのパブはすっかり変わっていて、もう以前の雰囲気はなかった。かつてはそれなりに落ち着いたバーであったが、今はうるさい音楽が流れ雑然とした雰囲気であった。ただそこで働いている青年が、半年働いて半年世界中旅行するという面白い生き方をしている人だった。ロンドンでダイヤの加工の仕事をしていて(そういう技術を教える専門学校があるそうで、お金になる仕事とのこと)、夕方仕事を終えるとこのパブに来て働き、ここに泊まり朝ここからロンドンの会社に行く、つまり昼、夜、働いているのだ。外国にもこんな猛烈人間がいるのだ。そういう生き方を暫く続けると彼は言った。日本にも行きたいと彼は言ったが、ちょっと下品な感じの人だったので、私はそれ以上何も言わなかった。

その向かいに素敵なホテルがあって一度泊まってみたいと思っていたので、行ってみると満室であった。こんな小さな漁村だから一つくらい空いているだろうという少々呑気な気があったが、しかしここはリゾート地で、大勢の人が週末に近郊から遊びに来る土地なのだ。そんなことは考えてもいなかった。私は柄の長いキャビンサイズのトランクをカラカラと引っ張って観光案内所にむけて歩き出した。その時道路のむこうの方から一人の初老の紳士が近付いてきた。日本人かと思ましがえるところだった。彼はロンドンの伊藤忠商事に30年勤めて、最近リタイアしたとのこと。日本には4度行って、九州から北海道まで歩いた。稚内、釧路など北海道の地名を挙げた。JRでは外人向けに全国縦断の安い切符を売っているとのこと。こんなことを話している内に、今夜デナーに来ないかと言われた。彼の家は町の中心から少し離れているらしい。マイワイフも喜ぶだろうと言われたが、ちょっと考えさせて下さい、あとでお電話しますとご返事する。キモノを着ていたのも、彼は気楽にはなしかけたのだろう。キモノは時々とても人助けをしてくれる。見るからにきちんとした紳士で何の心配も要らないが、夜の自由な時間に遊びまわること

が出来なくなると思うとちょっと残念な気がしたのだ。電話番号をお聞きして別れ、私はすぐ観光案内所に行った。ホテルを紹介してもらおうと、なんと彼の家の近くだった。私は彼の家を訪れることにした。

荷物をB&Bに預けてハイヤーでモームを育てた叔父の「オール・セインツ教会」に急いだ。以前ここを訪れた時には、運良く今の所有者である牧師が中年の女性のお客を送って出てきたところで、事情を話して写真を撮らせていただいて、握手（！）をした。モームの叔父のことはもう100年も前のことでよく分からないとのことだった。40才前後の大柄な感じの良い牧師であった。

モームはこの教会の牧師であった叔父を“Of Human Boudage”（1915）の中で、かなり辛辣に虚偽的な人間として書いているが、それは幼かった彼の偏見が大いに働いているのであって、実際はそれ程偏狭な人物ではなかったらしい。彼が亡くなった時には、その地方周辺の新聞には彼を称える記事が大きく載ったのである。それなりに地方の名士だったらしい。

モームはここで孤独で辛い少年時代をすごしたのだ。両親亡き後、彼を引き取ってくれた叔父夫婦の住む牧師館は、前回私が訪れた時に既に取り壊されていて見ることは出来なかった。13世紀建立の「オール・セインツ教会」は実に堂々とした建物で、私はその回りを何度もぐるぐる回ったが、虫一匹入り込めないほどの扉ががっしりと閉じられてあった。その堅固な建物は木と紙の家に馴染んでいる日本人の私には一種恐怖感のようなものさえ感じさせた。教会の庭には墓石がバラバラと気紛れに建てられていて（日本なら墓地は町からちょっと離れた所にあるものだが）まさに生と死が共存している、共存しすぎていると思った。“Jane Eyre”（1847），“Wuthering Heights”（1847）の作者である Brontë 姉妹の町を訪れた時も、生と死のそのあまりにも露骨な共存になぜか私は思わずゲラゲラ笑いだしてしまった。

フィッタルは漁村で、牧師館の若いお手伝いは夕方になると、実家のある海岸へ出かけたという作品の中にある。私も海岸に行くことにした。海辺ではたくさんの男女、大人、子供がいりまじって寝そべったり、泳いだり、のんびり遊んでいた。そこから少し離れたところに波止場があって、牡蠣など魚介類を食べさせるレストランというにはあまりにも素朴な建物が数件並んでいた。朝早くから開いていたらしく、私が行った夕方にはもう後片付けをはじめていた。いかにも漁村といった感じの町であったが、週末にはロンドンなど周辺の町から遊びに来る人々でけっこう賑わうらしかった。観光案内所のそばにはこの町の歴史を語る博物館があって、私は急いで一回りした。

そんなこんなことをしている内に、夜のとばりが降りはじめ、すでにお電話していたレイさんの家に向かった。番地を確かめつつ一軒一軒確認していくと、まもなく見つけることが出来た。レイご夫妻はとても感じの良い好人物で、奥様はロンドンのスペイン大使館に勤めていた若き日に彼と知り合い結婚した。今は巡礼（！）のお世話をする事務所に勤めていて、プランニングやときには添乗の役目もするとのこと。巡礼というと我々はすぐ四国の巡礼のことを思い、極めて日本的なものと思いがちだが、イギリスでも大変盛んであるとのこと、いささかショックを受ける。行き先はローマ法王庁やお膝元のカンタベリー大聖堂などたくさんあるそうだ。巡礼の好きな人は沢山いるとの奥様のお言葉であった。コクのある赤ワインを頂いたが、昨秋 NZ 学会の懇親会でも話題になったが、チリ産が安くて美味しいと彼も言う。彼の作ったパエリアはなんとも深みのある味であった。日本最良の彼は、「見返り美人」のような日本の切手を2,000枚集めて

いて見せてくれた。切手のデザインにかなり関心のある私でも、見たことのない切手があった。食事の間「六段の曲」のテープをかけてくれたが、その演奏には鼓の音が入るのだ。お琴はかって習ったことがあるのでこの世界のことは多少知っているが、これまで鼓の音の入った「六段の曲」は一度も聞いたことはない。「六段の曲」はどちらかというと、「春の海」などと比べると地味で単調なきらいがあるが、鼓が入ると品格がでてきて華やかな雰囲気になるのだ。これほど魅力的な「六段の曲」を聞いたことはない。しかもここは日本ではないのだ。感動的であった。居間には日本人形、舞扇など日本的なグッズが手際よく飾られてあった。

帰るべく玄関を出ると、彼は懐中電灯を持って裏の日本庭園に案内してくれた。そこには小さな池とその真ん中に真赤な太鼓橋が架かっていて、池の傍には石灯籠があった。そこに小さく立札があり、平仮名で「いしどろ」とあって、私は笑い出してしまった。「どろ」はマッドの意味ですと言うと、彼も大笑いであった。私はおもわず「モネの睡蓮の絵！」と言うと、「そうです！あの絵からインスピレーションを受けて、この庭を作りました」。池には小さな2匹の鯉を入れておいたら、いつの間にか3匹になっていたとの微笑ましい話であった。驚いたことにこの池は日曜大工の彼が作ったものなのだ。入ってくる時、玄関側に大きな足場が組まれてあった。年中家のあちこちを直しているとのこと。彼は私をホテルまで送ってくれた。このご夫婦は西洋人にしては珍しく別々に旅行すると思っていたが、最近はこちらも物騒になってきたので、彼等は旅行する時はなるべく一人で出掛けて、一人は留守番をすることにしているそうだ。

いろいろな話をしていると、「あなたの英語はイギリス英語ですね」と言われる。ハーそんなこと知るもんですか！ アメリカもイギリスもあったものではない。自分の言いたいことがあまりずれないで相手に伝われば有り難いと思うだけだ。いつもこれで良いのだろうか、この表現で良いのだろうかと考えながら話しているだけで、自信などあるはずはない。数年前、当時のニュージーランド大使に「英語が上手ですがどこで勉強しましたか？」と聞いていたが、私はそういう質問には「私は日本人ですから日本で学びました。1年間のニュージーランド生活以外は日本にしか住んだことはありませんから」と答える。そんなお世辞を言うに足るものは、多分二十代に英会話ナイトスクールに長く通って、そこでかなり質の良い英会話教育を受けたためではないかと思う。しかしお腹から息を出さずに口先で話したら「あなたは英語が下手だ」とニューヨークの運転手のはたもうた。結局、人の言うことはほどほどに聞いておくべきものだろう。英語教育もずいぶん変わってきて、かつては“can't”の発音がカントかキャントかというような重箱の隅をほじくるような小さなことで大騒ぎをしたものだが、今はロシア人はロシア訛りの英語を話し、インド人はインド訛りの英語を堂々と話す時代である。先週 NZ 関係の学会において、同時通訳で有名な村松増美氏もあまりこだわらないほうが良いということを書いてらした。ただ日本の英語教育は自然な英語を話すために必要な知識をもう少しつけ加えた方が良いでしょうに私は思う。かつて私は小樽短大の2代目学長北村氏に「(今はそんなことはなくなったが)飛行機に乗ると途端に英語が口から出てくるのに、なぜ飛行機を降りると英語が出てこないのでしょう」と聞くと「皆さん同じですよ」とのお答であった(小樽商科大学教授でいらした氏はアメリカ留学後フリーズの英語教育法を全道の中学、高校に広め、北海道の英語教育の中心的立場にいらした)。

いよいよ文科省が話せる英語教師を目指してきたが、何事にも熱心な日本人だから、そこそこ成果を上げるのではと極楽トンボの私は考えている。英語が話せないのは日本人ばかりではない。

数年前中国に行った時、我々と同じように中学、高校で英語を習ったにも拘らず、さっぱり話せない中国の女性達に苛立ったのを覚えている。もう一つ、内向的ではなく厚かましい性格でないと堂々と英語を話すことは難しいということを経験的に痛切に感じている。恥ずかしがりやではダメなのだ。

7

イギリス人はきわめてにこやかで親切だということを、今回ほど感じたことはない。前回訪れた時は「男も女もしたたかだ」という北海道新聞の特派員氏の言葉が印象的だった。一体それはなぜなのだろう。むこうが変わったのだろうか。あるいはこちらが変わったのだろうか。そして、日本人はどうしてこんなに仏頂面をしているのだろうか。帰ってきてからレイさんに頼まれて、彼が英語を教えたという帯広の女性にお電話すると、彼女も同じ意見で帰国した時、日本人が怖かったと言った。私は帰りの飛行機で私の席に近付いた時、愕然とした。本当に怖い表情の日本男性が私の席の隣に座っていた。彼に立ってもらってトイレになど行けるものではなかった。反対側には女性3人座っていたが、そちらから通路に出た。行く時も左右の人は一言も口をきかない。とうとう私が話しかけて、右の女の子は東京の高校生で一人で英語を勉強にイギリスに行くとのこと、左の若い男性はポーランドに友人を訪ねて行くとのことであった。ちょっと聞くだけで、あー今日本人はこんなことに興味を持っているのだなということが分かるのだ。目的地まで特にする時間にもない時間に日本人はなぜお互いにいろいろなことを話し合っ楽しいひとときを持とうとしないのだろうか。着いたら楽しかったひとときを感謝して、後腐れなく別れの挨拶をすればいいのだ。でも多摩美術大学の名誉学長であるグリゴリー・クラーク氏によれば、日本人ほど優しく正直な国民はいないそうだ。忘れ物を届けてくれるなんて、よその国ではありえないことだそうだ。となりの芝生は綺麗なのかもしれない。

2月からカンタベリー大学（NZ・クライストチャーチ、10年ほど前1年間留学した）で、日本文化を講義するので、目下その準備で晦日も正月もない生活を送って、17個の荷物をやっと送り出したところである。一体どのようにして、わが愛する日本文化をニュージーランドの学生に的確に伝えることが出来るだろうか。様々な準備はしたけれど、一体どんな結果になるだろうか。私の異文化コミュニケーションは成功するだろうか。ニュージーランド一の日本文化の講義にしたいと気持だけは張り切っているが、その反対になるかも知れず、その時は頭を丸めてスゴスゴと日本に帰ってくるのだろうか。ともかくベストを尽くしたいと思う。